

やまと 民俗への招待

やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

11月3日午後、近鉄田原本線箸尾駅に降りた。中世、「箸尾弁財天」として知られた櫛玉比安命神社の秋祭り本宮の日だ。前夜には、弁財天・南・的場・菖蒲の順に4台(5月23日付の本紙面で「3台」と紹介したが訂正し、おわびしたい)のダンジリが次々と勇壮な音入りをし、鐘と太鼓のダンジリ囃子と青年たちの祝いの伊勢音頭が境内に響き渡る。ダンジリは青年に守られて一晩境内に泊まり、翌日午後2時から、宮入とは逆の順で、神社を出て町内へ帰る。静かにたたずまいの続く道を歩いていると、昨日飲んだ酒の瓶が、道の

あちこちにまとめて置いたある。南から一台のダンジリが多くの人を連れながら、近づいてくる。菖蒲のダンジリだった。大屋根と小屋根の鬼板部分には御幣の代わりに桧の削り皮が長くたっぷり垂れている。独特の清浄感を感じさせる。

綱を子供たちが曳き、ダンジリの前方部を青年団が担い、後ろには青年団を終えた自警団の人々がつぶく。後部には方向を変えるための大桟子や小桟子が付いていて、町

歴史漂う戸閉祭り



中の狭い道をこの桟子でくぐり進んでいく。後ろに方向を変え、木のからは、酒食を提供するための小型の屋台もつい

高田川に挟まれた大きな集落だ。王寺から田原本を経て、三輪に至る三輪

街道と下街道が交差する交通の要衝で、村と町を合わせた在郷町的な場所として発達してきた。こ

こは中世の地侍箸尾氏の拠点でもあった。そうして歴史のなかで積み重ねられた氣風が、このゆっ

たりとした「戸閉祭り」に流れ込んでいるようだ

ていく。焼き鳥をおいしそうに食べている人もいる。

私以外、見たところカ

メラマンはない。地元の人が自分たちだけで、楽しみながら地車を曳いている。その様子は自然で和やかだ。祝儀や一升瓶が差し出されるたびに、青年たちは伊勢音頭を歌ったり、仲間を胴上げしたりしている。

あちこちに散らばったダンジリを一通り見て歩いていると次第に口が喜れてきて、うつすらと冷気が漂い始めた。部外者である私まで、不思議な満足感を抱いて帰途に就いた。

(奈良民俗文化研究所代表)